HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	上原専祿の学習論における地域概念の意味
Author(s)	阿知良, 洋平
Citation	社会教育研究, 33, 53-68
Issue Date	2015-04-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59236
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00231372_33_53-68.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

上原専祿の学習論における地域概念の意味

阿知良　洋　平*

目　次

はじめに・・・

はじめに

本稿で上原専祿の学習論を参照するのは、国家の主導による安全保障・経済体制の権力的な再構成時における、民衆の抵抗に必要な学習の在り様を彼が構想したからである。特に、その抵抗の内部の分断や行き詰まりに率直に向き合った点は、彼特有の所作である。

当時から、地域は、権力的な再構成において常に二重性を帯び、民衆の力強い抵抗と裏切り・欺瞞とを生み出す、リアルな舞台であった。それゆえに本当に民衆の学習に寄り添うならば、それは避けては通れない問題であった。上原の言うとおり、まさに地域は、民衆的に高評価を単純に与えることのできない、問題的なものだったのである。上原の学習論は、この問題的な地域が民衆の抵抗の基盤たり得る条件を考察したものと言える。

その条件については、片岡弘勝が「二段」の価値づけとして明らかにしている[1]。「二段」の価値づけは、一つに「当該共同体的価値秩序」の内在的把握、二つに「『地域』の『死者』に対する『生者』の回向と対話」から導出される[2]。そして片岡はこの二段の価値づけに対応して、上原の地域概念が「両義的」なものであると指摘している[3]。

一般にグローバル資本が要請する文化的画一性に抵抗するものとして、各地域が固有に持つ価値秩序は有効なものと理解される。しかし、そこが一筋縄ではいかない現実を手探りで格闘したのが上原である。

本稿では、片岡の整理を踏まえて、上原の学習論における地域概念の諸相を整理することを課題とする。本稿の方法は、実践という切り口から上原の学習論の展開を見る。そのことによって、上原の地域概念の二重の側面の内容が可視化できるからである。

１．上原専祿における実践の理解

(1) 上原における実践の理解

上原の学習論を実践という切り口から整理する旨を記した。上原に内在してそれが妥当であることを確認しておきたい。なお、以下上原の引用は、引用末尾に、成稿年（または講演年）、出典における文章の題目、出典の書籍名（『上原専祿著作集』＜評論社＞は巻数のみ記載）、出版年・出版社（著作集以外で初出のみ記載）、出典における頁数を記す。また、旧字体を新字体に改めた箇所がある。

上原の幼少期・青年期における思想形成の分析はここでの課題を超えるが、絶対的信奉を要請してきた養父との内面的格闘は、物事を相対化してみる感覚を身につけさせたようである。上原は「田中智学にならって天皇制の絶対性を信奉し、その信仰を私にも要請してきた養父との『内面的闘争』が続いていた」（1959、「学問以前の話」、24 巻、161 頁）と述べている。

この相対化して物事を捉える見方は、「大東亜戦争」への素朴な抵抗意識となって表れている。例えば「愚案録」では、「支那は支那の支那にして、日本の支那にあらず」（1918、「愚案録」、19 巻、231 頁）と述べている。

上原は何が良くて何が間違っているか、その規範と自らが生きることとの関連に関心を寄せていく。1940 年の『史心抄』では「甲の人には許されてゐることが、何故乙の者には許されてゐないのであらうか。（中略）それは規範意識のほのかなる目覚めであらうし、それは又、規範の絶対性に対するかそけき疑ひでもあらう」（1940、「『史心抄』序」、『史心抄』、1940・非売品、6 頁）と述べ、「所詮は生きること自体が問題なのであつて、生きる型が問題になるのではないにしても（中略）生命の考察はこの型の研究なしには済まされぬであらう」（1939、「気分的直観と形象的構成」、『史心抄』、81 頁）と述べている。

だから上原は、生きるという営み（実践）を基盤に、思考や認識の問題を捉えるという志向性をもっていった。その志向性は、晩年まで一貫している。この点は、本稿の方法の基軸なので、その論拠を以下に示す。

「理解が問題なのではない、体験が問題なのである。学問の成果が問題なのではない、学問生成に参与することが問題なのである。時代を理解することが問題なのではない、時代を創ることが問題なのである」（1936、「文化摂取の一つの場合」、『史心抄』、55 頁）

「思うに第一に（中略）実践のためには認識を要し、認識のためには実践を要すと説くのは逆説めくけれども、かようの実践を欠く者には他の認識手段も活きて来ないだろう」（1947、「個体生命の価値」、15 巻、79 頁）

「右に挙げたような非歴史的思惟を、たんに認識や思想の次元だけにおいてではなく、生活そのものの次元においてどう克服していくか、という実践問題に行動的に取り組まざるをえない、と思います」（1963、「現代認識の問題性」、25 巻、19 頁）

「それらの歴史的・社会的な、また、法律的・倫理的な問題は、世界史像の形成にかかわる認識問題の地平に止まるべきものではなく、日本の生きた現実の中で実際問題として処理されることが要請される、実践領域の問題なのである。その要請が、たといわずかづつであれ、充たされてゆかないなら、妻の『成仏』など、仮空の命題に終るだろう」（1973、「六　死者と共に生きる」、『死者・生者』、1974・未来社、436 頁）

(2) 時期区分

上原の学習論の展開を見ていくにあたって、時期区分をしておく。地域の意味が変わる局面に着目して次の 3 期に分けた。第 1 期は、戦前の中世独逸史研究時代から 1953 年頃までの、生活や地域が主要なモチーフとなる以前である。民族が世界史創造の主要なモチーフにあった。しかし民族も

地域と深く関わる。第2期は、1953年頃から1964年頃までの生活的な問題の表出単位としての地域である。ここで諸地域間の水平的関係としての13地域論が登場する。第3期は、1964年以降の身体感覚としての地域である。なお、第2期と第3期の区分は、社会的活動からの辞職がポイントであるため、古くは1953年の大学の辞職から決定打の1969年の妻の被殺までグラデーション的である。

２．中世独逸史研究における民族（第１期）

(1)世界史創造における民族

上原は終生、研究において自己を忘れない研究者だったように思われる。上原は「研学なるものは研究者一個の内的生活に由来し、内的生命によつて運営せられ、内的価値に基いて意義を取得する、と言ふべきであるかも知れない」（1944、「独逸近代歴史学の興起」、3巻、9頁）と述べている。

先述のように生きること自体を問題化する上原は、『ラムプレヒト　歴史的思考入門』の解説に見られるように、文化や経済を含めた社会の総体的な把握の枠組みを形成していく。上原は歴史的展開（発展）を分析する単位として民族を設定している。ラムプレヒトの方法についても「世界史的全体は諸民族における類型的展開の機械的総和ではないと考へながらも、有機的全体としての世界史事象においても尚ほ、歴史生活の主体は直ちに人類そのものではなくて依然として民族と考へられてゐる」（1942[4]、「カール・ラムプレヒトの生涯とその業績」、『ラムプレヒト　歴史的思考入門』、1942・日本評論社、310 頁）とまとめ、後年上原自身の捉え方としても「民族集団こそがリアルなものの中でも最もリアルなものにであって、そのようなリアルなものを媒介にして、自己と世界、自己と人類の全体とが同時に成り立っているとかんがえなければならないのではなかろうかという問題なのです」（1961、「世界史における日本」、25巻、83頁、強調点本文ママ）と述べている。民族の発想は、第1期にとどまらず上原の主要な契機となっている。

この民族の発想は、帝国主義との関連では、支配される側の民族的固有性への着目にもつながった。「大東亜共栄圏」に関しても「共栄圏内に包含せらるべき諸民族特性にいかなる共通性を発見しうるやの問題はもとより重要であるが（宇野圓空博士の場合）、差当つては先づそれがどれ程の文化圏に分岐してゐるか、文化圏の相違毎にいかなる精神特性が認められるか、又それぞれの精神特性の形成に何が参与しているかを尋ねる仕事から始められねばなるまい」（1943、「世界史的考察の新課題」、1943・『統制経済』第4巻第3号、統制経済編纂所、12－13頁）と述べている[5]。当時の日本の他国の文化に対する侵略・否定の史実を踏まえれば、「差当つて」以後の後半の指摘は相対的に抵抗的であり、13地域論に連続する萌芽はすでにあったといえる[6]。

上原は「発展」という歴史性について、「没落」「連続」「内的転成」の３形態を指摘している（1943、「サルウィアーヌス考」、2巻、271頁）。特に「内的転成」は、上原の諸地域の水平的発展像からし

て注目しておくべきだろう。この発展は、「固有文化」と「外来文化」のはざまで起きる（1943、「近著三則」、3 巻、176 頁）。

一方でこの時期、アジアという概念が前提されている。これは後年の「世界地域」（後年の 13 地域論の東アジア、東南アジア等）の概念よりも広い地理的範囲を指す概念として用いられている。これは、当該地域の内在的・自体的根拠によるものではなく、ヨーロッパの否定として捉えられたものである[7]。上原は「アジアは、ヨーロッパ人がアジアに対して政治的・経済的進出を行って来た、まさにそのことにおいて、アジアの歴史が始まって以来最初に、一つの共通の問題に直面するにいたったのである」（1953、「現代のアジアと世界平和」、13 巻、164 頁、強調点も本文ママ）と述べている。ヨーロッパとの関係による規定を超えて、それ自体として根拠をもつ各地域の水平的存立という意味での、13 地域論が成熟するには、第 2 期の「生活」の視点をくぐることが求められると思われる（後述）。

(2) 世界史創造の方法のゆらぎ

この時期は「研究者自己」は意識されていたものの、基本的に研究対象として世界史をみていた。ゆえに、生活する一人ひとりがどのように歴史を課題化するか、という学習論は見られない。ただし、対象としての社会における教育の役割については述べていた。上原は「教育自体の自主的精神にとつては、与へられた文化は、時にはその儘に維持せられるべきものと考へられ、時には知的・情的批判の対象とせられるのであり、前者の場合には与えられた文化の意識的育成が行はれ、後者の場合には与えられた文化を越えて新文化の創造が企てられる」（1939、「教育と文化」、『史心抄』、64 頁）と述べており、教育は文化の再生産／批判的再生産の境界に位置するものとして捉えられている。

上原は、アジア太平洋戦争中「人間の生命というものが粗末に取扱われていた」（1951、「個人の生命」、7 巻、148 頁）との認識から、大学の民主化・人文化の運動に取り組む。しかし大学改革は挫折し、上原は後年「私の『闘争』は、私が一国立大学の学長である、というなんとしても特権的な立場とそれから派生した諸地位に立ったものであり、いわば一個の『教職エリート』の、他のそれにたいする角逐に他ならず、教師大衆にせよ、研究者大衆にせよ、国民大衆一般にせよ、およそ大衆というものの、少なくとも直接的には参与しえないーむしろ、大衆を排除したー、いわばエリート相互間の私闘に過ぎなかった。（中略）大衆への通路をもたず、大衆の参加することがなく、いわんや大衆を主体としない闘争など、日本社会全体の民主化や人文化に貢献しうるものではありえない、という洞察は、当時の私にはまだ欠如していたのである。」（1974「本を読む・切手を読む」、『クレタの壺』、1975・評論社、299－300 頁）と述べている。

３．生活的な問題の表出単位としての地域（第 2 期）

(1) 変革主体理解の変化と学習論

変革主体としての大衆が、上原の課題となった。この課題において学習それ自体のあり方が価値をもって議論の対象となってくる。上原は「独立の問題だけをとりましても、日本国民の中に、独立への意欲というものを盛り上げていく活動や、そういう意欲を支えている情緒や感情をそれとして盛り上げていくような動きがありませんと、独立の必要性というものがいかに理論的に意識されても、多分独立などというものは非常にむずかしいのではなかろうか」（1956、「新しい文化創造のために」、24 巻、16－17 頁）と述べている。独立ということも「独立や平和の問題は、自分たちがどう食べていくか、どう自分たちの暮らしをよくしていくかということと密着しており」（1956、「新しい文化創造のために」、24 巻、16 頁）と述べ、生活が基盤にあることを主張している[8]。

ここで生成したのが「生活現実の歴史化的認識」という学習論である。「何か先験的に前提されたような概念で現実を処理するというのではなくて、いわばこの生活現実の一つ一つを自分の目で観察し、見つめていく」（1955、「第一　歴史研究への基本態度」、『歴史学序説』、1958・大明堂、4 頁）ような学習のあり方だった。生活ということに接近することでぶつかった問題が「地域の地方化」の現実だった。体制的には日米安保体制の構築が進むなかで、上原において「地域」ということが民族とは区別された理論的なカテゴリーとして登場する。

(2) 地域の把握

上原は、国民教育研究所における、六つの県の教員を中心とした歴史創造の試みである六県研究において、「地域というものには、この六冊のご報告でも明らかであると思うのですが、もろもろの問題がーもろもろの問題というのは、さきほど述べました政治と教育の問題、産業と教育の問題とか、あるいは文化と教育の問題とか、学問と教育の問題とか、民族と階級の問題といったものが、もっとも具体的に一まとまりになって、いわば生活的なかたちで出てくるのが、地域だと思うのであります」（1962、「学問の民主化と地域研究の意義」、14 巻、289 頁）と述べている。ここで、地域というカテゴリーの特色は「生活的なかたち」である。

上原が「地域における研究が、日本の学問全体の民主化を、どのような仕方でやっていける見込があるか」（1962、「学問の民主化と地域研究の意義」、14 巻、289 頁）と述べるように、これは、上原の大学改革実践の延長にもある。上原は「そういう意味で、地域を対象とする研究という意味での地域研究の重要性は、いかに強調しても強調しすぎることはないのですが、今度は学問体制の問題として考えたときに、つまり、地域における地域に立脚した研究というものには、日本の学問の民主化というものの上に、何か中央とはちがったような問題と課題というものが考えられるのかどうか。」（1962、「学問の民主化と地域研究の意義」、14 巻、289 頁）と述べ、地域を対象とした研究

と地域における研究を区別している。ここで地域は具体的な実践の場＝「世界史的現実の動態というものをリアリズムの立場で認識する共同作業」（1961、「非同盟主義の倫理と論理」、25 巻、98 頁）の場であった。

(3) 地域の生活と学習

ここにおいて、地域の生活現実を歴史化するような認識の形成は、それ自体として存在するのではなく、地域の生活そのものの主体的創造と不可分に関わるものとして把握された。上原は「実践しながら生きている生活そのもの、仕事そのもの、それを大切にしようとすれば、その仕事や生活を、それを客観化し、それのもっている意味を考え、それの新しいあり方について工夫していくという努力を経ないでは、日本国の主人公として日本の国民が日本の国を作っているんだという、その実体は実現されえないだろうと思うのであります」（1962、「教育研究の国民的課題」、14 巻、328 頁）であるとか、「つまり、認識というものは道楽認識ではなくて、実践にかかわり、実践を支えうるような認識であらねばならないと思いますが（中略）認識が主体的に形成されていくということを媒介にして、あるいは動機にして、実際の諸問題を処理していく場合の主体性を確立していくことが可能ではあるまいか、という考え方を民研はもっておるのでございます。」（1963、「世界・日本の動向と国民教育」、19 巻、400 頁）ということを述べている。

ここから学習を介した地域づくりへの発想（「矛盾を克服していくことによって、新しい地域になっていかねばならない」）が生成している。「地方」ではない「地域」を実践的に創りだしていく際の手がかりについて上原は、「生活発展の有機的連続性」の主体的な確保を主張している。あるいは「文化の伝統に即して伝統を越える」（1968、「文化の伝統に即して文化を越える」、26 巻、255 頁）とも述べている。次の引用を挙げておこう。

「どの地域にも必らず存在する矛盾を克服していくことによって、新しい地域になっていかねばならないのですが、その場合に大切なことは、それぞれの地域の発展が、つねにその地域の主体性においてなされる、ということです。ところで、地域がその主体性において発展しうるためには、地域の特殊の歴史、特殊の伝統、特殊の生活理念を踏まえることが、どうしても必要だ、と思うのです。地域の特殊の歴史を踏まえる、ということは、生活発展の有機的連続性を主体的に確保していくことを意味するのであって、地域の歴史に足を引っぱられることではありません。」（1963、「民族の歴史的課題と国民教育の任務」、14 巻、352 頁）

このようにして、各地域が対等に主体的に生活を発展させていくさまの理論的結実が 13 地域論であった[9]。なお、「地域の歴史に足を引っぱられること」ではないと述べられているように、各地域が閉鎖的な郷土愛に閉じられるものではないことは意識されている。先の「内的転成」のところで

も固有文化と外来文化という問題で触れた。

13 地域論では、例えば「どうすれば内側からアフリカ認識というものができるかという問題、アフリカ以外の世界の人間がそれをどう見るかということではなくて、アフリカ人自身が、あるいはアフリカという土地の側からアフリカ史というものを、アフリカ史像というものをつくり出そうとすると、どういう方法があるのかという問題」（1963、「続『現代認識の問題性』」、25 巻、169 頁、強調点本文ママ）が課題化され、地域の知を内在的に把握する（「個性化的認識」）方法として社会人類学が着目されるようになる。

13 地域論からは、アジア太平洋戦争への加害性の自覚も語られる。上原は「南海の諸民族にたいする日本人としての深い負い目－それは賠償ぐらいで片づくわけのものでは決してあるまい」（1963、「南海の亡霊」、『クレタの壺』、255 頁）と述べている。

(4) 運動と、地域という構想との矛盾

上原は地域ということに接近するにつれて、各地域の生活の矛盾の漸進的な克服によって「生活発展の有機的連続性を主体的に確保していく」ことを基盤とした運動のあり方を構想するに至った。一方で、実際の運動は、革新運動の共通の言葉で彩られた側面が色濃く出ていた。この矛盾に上原は苦しんでいくことになる。上原は運動の現状について、「平和運動というものは一応、いろいろな格好で展開されておりますし、民主化の運動も進められてはおります。現象的にみればジグザグのことはあっても一通りのことはやられているようでございますけれども、これで権力とか反動勢力に、いつでも効率的に、いつでも能動的に取り組んでいると言えるのかと申しますと、いっこうそうなってはいない、と私には思える（その中には革新政党のあり方や労働運動のあり方に対する私の見方というものも含まれておるわけでございますが）。結局動いてはおっても、意味あるように動いているようにはなかなか考えられない」（1962、「危機に立つ日本の学問」、19 巻、273 頁）と述べていた。

上原は、こうした運動への関わりを、むしろ体制再生産への加担と捉え、各種の役職を降りていく。上原は「へんに社会的な活動、社会的活動というようなことをいいながら、実は社会の混乱を、一層それに輪をかけるようなことをやっていながら、なんか社会のために働いているというような錯覚に陥る、あるいは社会のためになれかしと思ったことが、実はマイナスのことしか出てこない、ということをいやというほど経験させられた」（1970、「親鸞認識の方法」、26 巻、454 頁）と述べていた。上原は疲れ果てていた。上原は後に振り返って「ひっくるめていえることは、どこでも私はひどく疲れたし、また、疲れさせられた、ということである。そして、ひどく疲れ、疲れさせられたのは、国立の機関であれ、民間の団体や施設であれ、危機に立つ民族の歴史的問題情況に面して、それぞれがあるべく、また、ありうる姿－と、私が思考したもの－と、それぞれが現実にある姿との、余りにも大きい距離というものであった（中略）つまり、『外部の闘争』を前にして、私はすで

に『内部の矛盾』において一歩また一歩と敗退していった」と述べていた（1974、「本を読む、切手を読む」、『クレタの壺』、312 頁）。

内部の分断の現実に目を向けない運動の性質へ上原は警告を次のように述べている。「労働者も農民も学者も教師も、一緒になった統一と団結というものが望ましいと思うにつけても、現在はそれはたんなる掛声ではどうにもならない。そういう情況をどうすれば克服していけるか、ということを考えると同時に、分裂の度合いとか構造というもの、つまり、わが身自身にふりかかっている、われわれ自身がそのなかにおかれている、今のような分裂状態というものの現実を、もっとみつめていく、掘下げてその原因や関係を明らかにしていく、ということも必要になってくるのではないか、こう思うのでございます」1963、「世界・日本の動向と国民教育」、19 巻、394 頁）。

４．身体感覚としての地域（第 3 期）

一方で 13 地域論という実践的な見通しとしての地域論が生成したのと同時に、他方では、それを実践しようとして壁にぶつかって以降の上原の第 3 期において、その分断下の疲弊から新たな内容の地域の把握が生成していく。

(1)「私」という世界の登場

様々な運動の役職から降りていった上原にとって、分断の現実の挫折にとどめをさしたのが、妻の被殺だった。上原は「ようやくにしてたどり着いた、もう、もうほんとうにやっと、やっとたどり着いた人生の砦みたいなもの、三人で一つのそういう砦みたいなものが作られた」（1970、「親鸞認識の方法」、26 巻、454－455 頁）にもかかわらず、「長い間の生活の伴侶がなくなったというようなことではなくって、そこにひとつの砦が崩された」（1970、「親鸞認識の方法」、26 巻、455 頁）と述べている。

妻の被殺の経験にあって上原は、その時点から歴史の影響を受けないような、時間が止まってしまったような、そんな世界が登場したことを次のように語る。「ここに、『問題に最も切実なつながりをもつ当人としての私が』とか、『当面の設問者としての私に』とか、『とりわけ私に』というふうに、『私』というものが限定されているのはどういうわけか。ここにいう『私』とは、思考や観察の漠然たる一般的主体などではなく、あの一瞬における妻の死を、容易に歴史化することのできぬ不動の現在の根本事実として意識せざるを得ない『私』なのである」（1970、『歴史的省察の新対象新版』「あとがき」、15 巻、199－200 頁）。第 2 期までは、地域に暮らす個々人がどのように主体的な社会把握をなし得るかが課題であったが、ここでは、明確に「私」と社会とのつながりが省察の対象になっている。

(2) 学習論－「私」の解放とシステムの再構成との両輪

「私」という非歴史的世界の開示は、それと区別される個人の肉体的次元を対象化し、命の問題の肉体的次元を鋭く照らし出した。ここで「個体生命の価値」を再録して『歴史的省察の新対象』の新版を生み出したことの意味が述べられる。「次に本書前編の最後の小編『個体生命の価値』（一九四七年十月五日成稿）にいたって、ようやく、肉体的実存としての現実的個人の具体的生命が問題とされるようになり、また、そのようなものとして評価されるにいたったように見える」（1970、『歴史的省察の新対象　新版』「あとがき」、15 巻、213 頁）。

同時に、ここから対象化されたのが、虐殺し排除した死者を粗末に無視することによって生を維持する生者たちの存在だった。死者との対話が新しい学習論として登場する。上原においては、この肉体的な命を脅かすシステムの批判的再構成が妻の供養＝共闘の条件となった。上原の死者との対話論には、次の３つの死者－生者関係がある。つまり、第一に、現状のシステムに包摂されているものにとっては、死者の声は聞こえず生者が主体と思い込んでいる関係である。第二に、ひとたび現状のシステムから排除された死者がのっぴきならない問題として発生すると、死者が主導的な関係になる（「肉体は滅んだけれども魂が残る、というそんな引き算的なものではなくて、死者は死ぬことによって、なにか新しいものとしてそこに存在する」＜1970、「親鸞認識の方法」、26 巻、457 頁＞「死者のほうがむしろ主導的」＜同 458 頁＞「死者が裁くんだ、と」＜同 459 頁＞）。第三に、死者との共闘の可能性である。この成立は、「供養」の成立と同義だが、それには個々人の命を尊重するシステムの創造を介することが不可欠とされる（「まことに稚拙な生活記録に過ぎないことを恥じるものではあるが、そこに記録された生活経験が、それに続く私の諸作業とともに、やがては『死者』たちと『生者』たちとの共存・共生・共闘の正義に輝く香潔な歴史と社会が創り出されてゆくための一機縁をなしうるようなら、そのとき亡妻への私の『回向』の志も始めて生かされることになるだろう」1973、「序」、『死者・生者』、8 頁）

個々人の命を尊ぶシステムの創造と「私」という世界の解放とが、相互規定的に構想されていたことがわかる。運動が見失っていたような分断・分裂批判の準拠点＝命が、死者との対話によって析出できることがわかった。

(3) 地域の把握

「私」の世界の登場は、命を犠牲にする、政治運動を含めた現状のシステムに対抗する地域の新たな条件を生み出した。上原のこの時期の地域の把握は、日蓮に即して語られる。確かに、日蓮は分断下の裏切りによる危機を幾度も法華経の実践で乗り越えていった実践家だった（「日蓮としては、そういう迫害がおこることを覚悟のうえで、法華経を弘めるという仕事にのりだしたのであります。その結果、予言されたとおりの迫害が、それからそれへとおこってくる。そこで、こんどは、法華経に書かれていることは正しい、という確信が生じる」1956、「日蓮を現代にどう生かすか」、

24 巻、342 頁)。

この日蓮研究のなかに、地域の把握が見られる。それは、迫害され続けた最後最後（三度の「国家諫暁」、これだけやってダメならもうここは私のいるところではない）に、ぎりぎりの抵抗の際（鎌倉退出／身延入山）に、描出された地域把握である。少し長いが、引用しておこう。

「諸縁が私を繁縛している東京の地を去って」（1974、「本を読む・切手を読む」、『クレタの壺』331 頁

「そのころの日蓮にとっては、『鎌倉』はどのような角度からしても本拠的地点であることを止めてしまった一つの地域、どのような意味においても身近な地縁をそこに実感することのできなくなった一つの空間、自分を迎え入れるのではなくて自分を拒絶する一つのアトモスフェールになり終わっていた」（1972、「日蓮身延入山考」、『死者・生者』、138 頁）

「望見はされる身延の山の山裾を中心とした新しい生活の自然環境をふっくり押さえて、『この山中』と言いあらわしたのではあるまいか。いっそう難解であるのは、『心中に叶』う、という一句の意味である。形式的にいうなら、波木井の郷へ到来してそこで日蓮が始めて触知した新しい生活環境と、日蓮を促してこの地にまで日蓮を運んできた心情と意識との、好ましい適合の直観をこの一句は意味しているだろう。しかし、内容の重きにふさわしい理解を求める場合には（後略）」（1972、「日蓮身延入山考」、『死者・生者』、155－156 頁）

鎌倉の拒絶、身延の受容、いずれにおいても、地域というものに対する独特の把握が見られる。それは「私」の世界からの有機性、つまり、良／悪縁が自然とある／絡みついているような、受け入れてくれる／拒絶する雰囲気のあるような、そういう「私」の世界と良くも悪くも一体的に広がる空間の質を問題化していることである。こうした空間性の把握は、「私」というものとの関連で理論的には位置づけられていなかったが、大学を辞めたときの仕事部屋（「芸文学堂」）においても述べられていた。客観的には、大学の辞職は、「私」というものを強く意識した出来事だったからであろう（「つまり、芸文学堂の建物全体も、この部屋も、それらがまさにあってほしいように、現にあるのである」＜1959、「芸文学堂を建てる」、24 巻、131 頁＞「ここにも私の生活心情との極めて快い連合関係が成り立つのである」＜同 132 頁＞）。

ただし、身延入山の引用（上記３つ目）には、「しかし」が続き、身延入山は、鎌倉での矛盾に規定されてはじめて身体（「私」の心情的部分）と適合的な場たり得ることが強調される（1972、「日蓮身延入山考」、『死者・生者』、156 頁）。この点は、分断下の矛盾が極限に達した時、その矛盾の所産としての「連合」「適合」的な地域が生まれ、それが闘争の新たなステージには不可欠であることを示している。上原においても、東京の抱えた矛盾との格闘の結果、新しい闘争の場に辿り着いたと考えるべきであろう。

５．晩年（第 3 期）の実践

４で「私」の解放あるいは「供養」は、命の価値を基盤とする社会を創造してはじめて可能になるという両輪について確認した。だから、この第 3 期でも社会の仕組みの再構成に向けた実践（闘争）は続いている。

(1)「時代」の対象化

妻を被殺され、死者を無視するような社会を課題化した上原は、それを見ると自分たち（生者）のシステムの限界が見えてしまうような働きをする者を排斥する社会の力に敏感になっている。上原は、1971 年、東京を退出し京都に入った。上原が住むその「人の行き交うことも稀れな僻遠の小砦」（1973、「時代・人・仕事」、24 巻、292 頁）も「ここはここなりに余りにも日本の縮図」（同、291 頁）であって、「日本全体のひずみにひずんだ生活や文化の病変」が感じられていた。

上原はこの 1973 年の文章において、その問題を誰かを排除する規範として「病変」を捉えていた。おそらくは、自分自身も含めて体感していたことだろう（ただし、下記 292 頁引用の「『人』」は山本安英を指している）。なぜなら、排除されるもののなかに「身辺的な事物のうちに公共的な問題を見出そうとする思惟方法」（同、291 頁）が含まれており、それは、上原が社会的役職について活動していたころの主要な方法だったからである。

「だから、何事につけても、ねばりにねばったり、吟味に吟味を重ねたりすることは、田舎くさいとして退けられるだけではなく、悪徳として排斥されるのが当今である。だから、また、身辺の暮しに即して公共の生活を生き、公共の問題を身辺のそれとして消化しようとするなどは、野暮の骨頂であるだけでなく、大勢に反したモラルとして顰蹙を買うのが今日である。だから、また、真実というものを軸として生活の構築を試みたり、理想というものを基底にすえて文化の創造を企てたりすることは、無意味な努力として嘲笑されるだけではなく、うるさく、近所迷惑な所業として排撃されるのが、時勢である。ここに、当今といい、今日といい、時勢という。それらを『時代』の名で一括するとき、『時代』は、地味で、謙虚で、真剣な『人』と『仕事』を蔑視しているだけではなく、それを抹殺しようとしているようにさえ見えるのである。」（同、292 頁、強調点は本文ママ）

ある意味では、戦前彼自身の問題として父との内面的格闘のなかで問うた「規範」や「型」という問題意識が、社会的活動の離脱によって「私」が鮮明化されたことにより、あらためてここで再現されている。世界を対象の位置においては感じ取れない、世界に内在する「私」の世界が広がることで、空間性を感じ取れるようになるからである。

この病変に対抗する方法を、上原はどのように構想していただろうか。

(2)「時代」に抗する文化

この時期、社会的役職から離れた上原に実践事例に対する言及は少ないが、山本安英の試みには同志を感じている。上原は東京を離れるとき、「大勢でやれない、というなら、一人でやるまでだ、そのうちに同志や共闘者が現れないものでもあるまい」(1974、「本を読む・切手を読む」、『クレタの壺』、313 頁)と考えていたわけであるが、同志の一人として挙げられるだろう。また、それは、「時代」に抗する文化の創造という方法に、上原が希望を持っていたことを示している。

「このような今日の『時代』のさ中において、もう明日の『時代』に仕えようと、地味に、謙虚に、真剣に自分の仕事に打ち込んでいる数少ない人たちの姿も当然のことながら眼に浮かんでくるのは、ありがたい、というものだ。山本安英さんもその一人だ(後略)」(1973、「時代・人・仕事」、24 巻、293 頁)

山本安英らは、近代日本において権力的、統一的につくりかえられたことばを、もう一度日本の生活に即して再構成することを文化創造の中核に置いていたと言える[10]。

同志ということであるから、上原自身にも実践の構想があった。実践の起点は、4 で見たとおり、命の価値を尊重する社会の仕組みの創造にあった。上原は、そうした社会の形成のために世界史曼荼羅の創造が不可欠であると述べている。上原は、「『全死者と全生者との共存・共生・共闘』の構造と動態としての世界史像の形成」(1974、「本を読む・切手を読む」、『クレタの壺』、333 頁)と述べている。

(3)学習論における切手

『クレタの壺』では、学習方法論に新しい提起が見られる。『クレタの壺』における世界史像創造の方法は、切手をそのツールとして用いたことである。そこには、世界史像を描くための書籍に大衆がアプローチできないという問題意識が貫かれていた。上原は「しかしこのことが経済的にも技術的にも不可能なのが『庶民大衆』というものなのである(世界各国の重要新聞のすべてを、同時且同所で閲覧しうるチャンスは、今日の日本の大衆には与えられていない)。それにもかかわらず、一つびとつの国のーそして、全体としての世界の、ー問題情況についての主体的で自由な、しかも客観的で非恣意的な認識をもたざるをえないのが、今日の『庶民大衆』というものなのである。この矛盾の前に立たされた私は、その矛盾の解決策として、というよりも、むしろ問題発掘の新手段として、新聞とは全く別のジャンルに属する情報群の利用に思いいたった。『切手を読む』という作業を私が始めたのは、このような経過においてである」(1974、「本を読む・切手を読む」、『クレタの壺』、315ー316 頁)と述べている。学習のツールに含まれる権威性が焦点になっている。

このような、教材(学習のツール)のもつ権威性の課題化は、山本安英らのことばの問題とも共

通するといえる。ことばや教材の質の指摘は、第2期の学習論よりも深化している。

(4) なお、社会的課題へ

上原の第3期は、妻の死という最も身近な身辺の問題にこだわりながら、それでもなお、大衆的に広がる動きを持つような学習の方法を追求していた。そしてこの世界史像形成の先には、社会的連帯の造出と平和ということが、なお、この第3期でも見通されていた。上原は、「そのような生活者としての非専門家的大衆の社会的連帯造出の実践作業に裏づけられた認識の実務としてのみ、平和論がその上に構築されるはずの『人間の歴史の総体とその必然性への認識』への接近も可能になるのではなかろうか」（1975、「橘口倫介著『十字軍－その非神話化』を読む」、19巻、265頁）と述べている。

だから上原はこの時期も、アウシュビッツやソンミなど、世界史的に広がりを持った死者との対話もしているのである（1970、「裁かれる生者・裁く死者」、26巻、426頁）。

「私」の世界から、規範や時代を敏感に感じ取り、そこから言葉や教具の権威性の問題に接近していった。より一段深いところから世界史像の自主的形成を構想しなおしていったといえる。文化の再創造が大衆的な機運となっていくことを、まさに個々人の「私」の生活現実の世界から構想し直していたと言えないだろうか。上原は、第2期の構想である「政治というものに対して目標を示すような」（1959、「文化と政治について」、24巻、67頁）文化の創造を、この時期もなお見通していたのではないだろうか。

６．未完の地域概念－まとめにかえて

第1期の上原が、単に哲学的・思弁的なものとしてだけではなく、経済的・生活的なものとして生を捉えていたことからわかるように[11]、上原の初発の課題意識は、そういう生と規範・型の相対化との関連にあったと思われる。

第1期（アジア太平洋戦争を含む時期）からわかるように、地域は抵抗と侵略のはざまにある矛盾的なものだった。戦後の運動の中では、権力・資本に抗するものとしてその抵抗性がとりわけ着目されたが、そこでは表面上の言葉での連帯と現実の分断とのはざまで上原は悩んだ。その悩みの中から生成したのが死者との対話による命の価値だった。これは、地域の矛盾解決の準拠点と言える。しかし上原は、第3期では、地域という現場を離れて[12]世界史像の形成を構想したため、「私」の世界を通してみえた個々人の具体的な命の尊厳というものを含みこんだ上での、生活としての地域の構想は未完に終わった。この第3期の内容を含めて、第2期で大切にされていた労働や食等の、生活というとことから地域を描きなおすことができるかは課題である。未完と評するのは、上原の初発の課題意識を評価軸としてである。

その場合、上原の第3期は、社会のシステムをつくり変えることはやめて、意識（供養）の世界に閉じこもったものではない。むしろ、第2期のような実践との葛藤として読み解かなくてはならない。自分のからだを犠牲にすることは命の価値に反すると同時に、実践に内在しようとすれば自分のからだを犠牲にすることになるという葛藤である。抵抗する主体の内部の矛盾を解決しつつ、地域の外部との闘いを進めていけるような、地域における実践と学習の論理を解明することは私たちに残された課題である。

とはいえ、第3期に至る話はリアルである。現実の政治運動において分断が不可避的に生じ、多くの人間が疲弊し希望を喪失している場合がある。まさに抵抗する側内部の矛盾であるが、抵抗する側において内部的にその求める価値が実現することと、運動目標の達成とは、同時に成立しなければ、批判的な学習・運動は真に成立し得ない。第3期のリアリティを実践に内在して埋め込んでいくことが上原の理論をより発展的に継承する鍵となるだろう。

※本稿は、日本社会教育学会第61回研究大会（2014年9月、福井大学）における自由研究発表「上原専祿の学習論における地域概念の意味」を加筆・修正したものである。

---

[1] 片岡弘勝「戦後主体形成論における『地域』概念」『日本社会教育学会紀要』34号、1998。

[2] 前掲片岡39頁。

[3] 筆者は、片岡の「二段」の価値づけという枠組みは、後年の＜抽象的肯定＞＜具体的否定＞という上原体系の把握まで一貫していると把握している。地域が「両義的な概念」であることの指摘は、片岡弘勝「上原専祿『主体性形成』論における価値づけ方法」『日本社会教育学会紀要』42号、2006、43頁。

[4] 『ラムプレヒト　歴史的思考入門』のみ出版年を記している。

[5] 以上の引用および先述の1918年の「支那は支那の支那」の記述の事実からして、当該『統制経済』論文の末尾、13頁「何れの精神がいかなる意味で世界的に最も強力であるかを実証しつつあるところの、一連の事象として大東亜戦争を把握すること」という記述は、諸地域の垂直的序列関係を前提としており、上原の一連の論理構成および当該論文内部の論理構成からしても、論理的な矛盾が見られる。その文には上原とは別の論理が読み取れるが、その矛盾がなぜ生じているのかの解明は今後の課題としたい。なお、戦時下の文献読解の方法については、山田正行『平和教育の思想と実践』2007、同時代社を参照。

[6] 無論、侵略され殺戮されたアジアの民衆、教育で意志を麻痺され殺された日本の民衆の恨みに立って、許し難い表現もある。

[7] こういう論理で批判する方法は、上原の議論内部に見られる。それは、ヒストリア・ムンディの批判に見られる。「ランケの『世界史』の枠組をあまり出ない全巻の構造、したがってアジアをアジアとして捉えようとするのではなく、ヨーロッパとのつながりにおいてアジアを処理しようとする方法」（1959、「＜ヒストリア・ムンディ＞について」、25巻、433頁）。

[8] 無論、近年日本で議論になっている自前の軍を持つという独立は、この生活的な独立概念から見て、独立ではなく、グローバル資本主義への迎合に過ぎない点に留意。

[9] 地域に関わって補足しておく。沖縄を「侵略によって獲得したのではない」と認識するように「国民」という枠組みが孕む問題は、現時点の歴史認識の水準から上原を検討すれば指摘せざるを得ない。上原は「侵略によって獲得したところの他国の領土に対する権利が、その正当な主体に返還せられなければならないとするならば、侵略によって獲得したのではないところの領土－例えば、琉球、小笠原諸島等－は、もとより日本の領土として尊重せられなければならないのである」（1951、「講和と日本人の立場」、6巻、102頁、強調点は本文ママ）と述べている。筆者はこの認識の問題性を指摘しつつ、上原の提起した曼荼羅的世界史像の理論や「生活発展の有機的連続性」の視点は、むしろ米軍基地の権力的・暴力的な増強に対して、抵抗の根拠となる理論だと考え、上原の理論を整理した。上原の理論からは、大浦湾周辺地域の「生活発展の有機的連

続性」を考えるなら、明らかに、当該地域の生活に米軍基地は全くをもって有機的に連続しないどころか、生活の歴史に断絶を生むものであることが主張できる。

[10] 山本安英の会『自分のことばをつくる』1984、未来社など。

[11] 上原は中学卒業後、河上肇に関心を持ち、貧民窟調査もしている（1917、「貧乏の本質を論ず」、18 巻、69－87 頁、など）。

[12] 移住した先の京都の地域が、第 2 期のような意味での地域性を意識したものではなかったことは、上原弘江の叙述からわかる。「私たちがこの地域に住むようになったのは、そういう経緯による。別に気に入ったわけではなかったが、私に早く療養させたい、と父は願って、少し急いだ」（1987、上原弘江「あとがき」、25 巻、585 頁）。